

ラオス中部・アランノイにおける食生活・食料獲得活動と出生力

Diet, Food Procurement Activities and Fertility in Alang Noy, Central Laos

佐藤廉也 (大阪大学)・蔣宏偉 (総合地球環境学研究所)・西本太 (長崎大学)・
横山智 (名古屋大学)

Ren'ya SATO (Osaka University), HongWei JIANG (Research Institute
for Humanity and Nature), Futoshi NISHIMOTO (Nagasaki University),
Satoshi YOKOYAMA (Nagoya University)

email: rsato@let.osaka-u.ac.jp

はじめに

この発表では、ラオス中部の小規模な焼畑村における食事記録を主な素材として、世帯のライフステージと食料獲得活動との関係を明らかにするとともに、栄養摂取・生活史・出生力の諸関係について議論する。報告者らは、ラオスの小規模農村における生業と人口の相互関係を明らかにする研究プロジェクトの一環として、ラオス中部・セボン近郊における焼畑農村（アランノイ村）において長期の食事調査（2015年5月～2016年9月、ただし2015年11月のデータは欠損）を実施した。これは、世帯員構成の異なる数戸のサンプル世帯に依頼して、毎日の全食事メニューを記録してもらったもので、現在までに7,000回を上回る食事記録が得られている。この日誌には、食材ごとにその獲得者に関する情報もあわせて記録されており、誰がどこで獲った食材が誰の口に入っているのか、食生活のなかで自給によるものと交換や購入によるものがそれぞれどの程度を占めるのかを推定することが可能となっている。

一方、この村における出生記録の復原結果によれば、農業を主な生業とする社会としては低出生力（1960年以降のTFRは3.1～4.4）であることがわかっており、また村びと全員を対象とする体重・体脂肪測定の結果、低体重・低体脂肪の割合が非常に高いことが確認されている。アランノイにおける低出生力と低体重、そして毎日の食事と食料獲得活動との間には、どのような関係が存在するのだろうか。

この発表では、食事記録の分析結果を中心に報告し、村の人びとが季節ごとにどのような資源に依存し、その獲得に際してどのような協力・分業をおこなっているのか、またそれを個人と世帯の生活史から見るとどのようなことが言えるのか、概要を述べるとともに、明らかになった食料獲得活動・栄養摂取の状況と出生力との間にどのような関連が見られるのか、現時点で可能な推察と展望を述べたい。

食事日誌にみる栄養摂取と分業

食事日誌は、「いつ食べたか」「どこで食べたか」「誰と食べたか」「モチ米をどのくらい食べたか」「おかずはそれぞれ誰が作ったか」「おかずの食材はどこで獲ったか」「おかずの食材は誰が獲ったか」を毎日の全食事について記録する形式となっている。これを村内の男性2名に依頼して自らの世帯の食事を記録するとともに、近隣の数戸のサンプル世帯の記録を毎日とってもらった。あわせておかずを写真撮影してもらい、調理法や分量の推定もできるようにした。

アランノイの食事は、中部ラオス農村に広く見られると同様に、ほとんどの場合モチ米を主食に、

副食となる1～数種のおかずを組み合わせたものである。調理に油が使われることはまれで、副食は全体的に低脂肪食が多く、モチ米が主要なカロリー源となる。図1に見るように、セポン川沿いに立地するアランノイでは1年を通して淡水魚の摂取頻度が高く、主要なタンパク源といえる。鶏肉などの摂取頻度も低いとは言えないが、世帯ごとの格差が大きい。家畜の肉の摂取頻度が少ない世帯は、齧歯類やトカゲ、カエルなどの小動物によってタンパク質を補っている。タケノコや多種多様な葉菜・果菜類も毎日の食事に欠かせない要素となる。

食材を得る場所は、焼畑周辺（農作物、タケノコ、野草類、小動物など）と河川（魚・貝類）に大別され、10歳代の子供のいる世帯では子供が食糧獲得に果たす役割も少なくない。各世帯のライフステージに注目すると、子供がまだ小さい段階では親の世代からのサポートを受け、子供が10歳代になると食料獲得に果たす子供の役割（タケノコ、野草、淡水魚、カエルなどの採取）が次第に大きくなり、40歳代以降、子供が結婚して独立すると、子供や親の世代に援助をするというように、世代のライフステージに従ってエネルギーフローが変化していく様相が認められる。

栄養摂取と出生力との関連

体脂肪率が一定水準を下まわると月経が停止し出生力に影響をおよぼすことが指摘されている（Frisch 1991）。これらを西本らの調査によるアランノイ女性の出生力動態のデータとあわせ考えると、20世紀後半期以降アランノイの低出生力が持続する要因には低カロリーの食生活が関連している可能性が考えられる。とりわけ、年齢別にみて出産期後期の女性の出生力が低いことと、著しい低体脂肪率が40代女性に多く見られることは注目される。こうした年齢階級別の差異がアランノイにおける世帯内の分業や家族のライフコースにどのように関連しているのか、さらに継続調査によって必要なデータを補充し、検討を続ける必要がある。

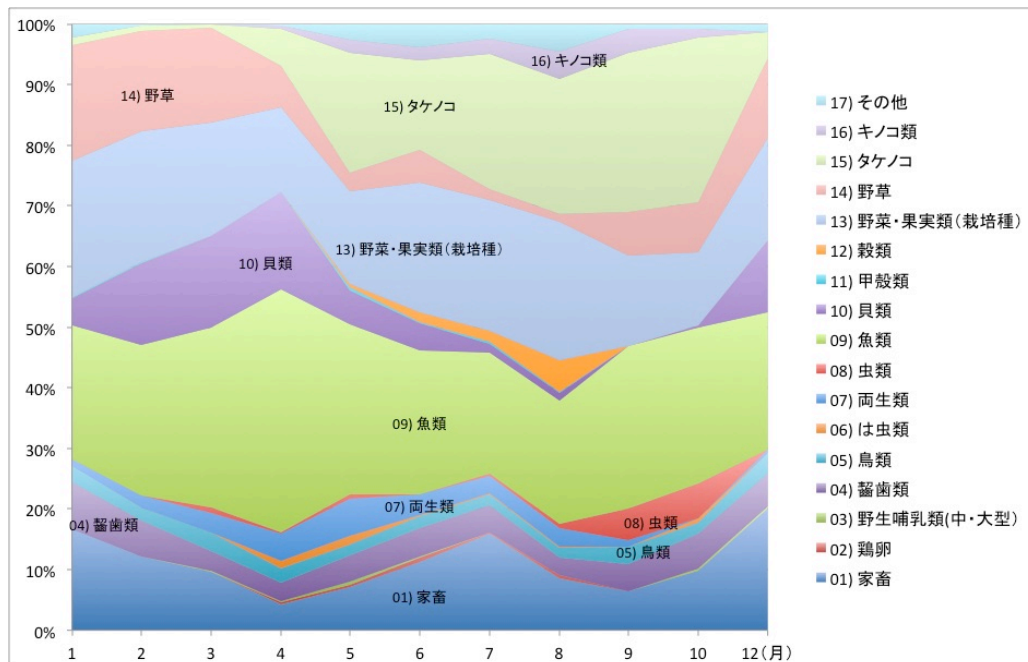


図1 主要な食材の月別出現割合

[文献]Frisch, R.E. 1991. Body weight, body fat, and ovulation. *TEM* 2(5): 191-197.

[本発表に必要な調査は JSPS 科研費 (JP25257004、研究代表者・横山智) を用いておこなった。]